

〔特集：第7回国際家族看護学会とカナダ家族看護研修ツアーの成果報告〕

家族看護学におけるエトス —Burchard 博士とのロビーでのディスカッション—

泊 祐子

第7回国際家族看護学会が行われたビクトリアは花も美しく、落ち着いた感じの町で、穏やかに時間が流れた印象をもちました。

学会では多くの企画がなされましたが、当然ですが英語のやりとりですので、私にはなかなか理解することが困難でした。D., Burchard 博士は、興味を引く“Ethos, Ethics and Endeavours : New Horizons in Family Nursing”というタイトルで講演をされましたが、哲学的用語も多く、訳が分かりませんでした。しかし、会場でも質問をされた森山先生が、すかさずディスカッションを申し込まれ、日本人の仲間たちで Burchard 先生を囲み、お話を聞くことができたことがとても勉強になりました(写真1)。

私の疑問は、なぜエトスなんだろうかということから始まりました。私の理解の範囲ですが、Foucault²⁾の倫理的枠組みを下敷きとした Burchard 先生の家族看護におけるエトスの協働を説明します。

エトスは、コミュニティの精神特性を含む、コミュニティで価値があると認められた態度・信条などのモラルです。語源は古代ギリシャに遡り、性質を意味するギリシャの価値だそうです。エトスはコミュニティに支持されているので、みんなで分かち合えるのです。それゆえに、エトスの属性(Attributes)は、ものの見方、帰属感と義務感になります。これらの属性があるので、社会的結束に貢献します。エトスはフランス革命にも影響したと言われています。

社会の最小のコミュニティである家族は、社会の要求や価値観を伝え、また継続させます。家族看護を考えると、家族の精神性は個々の家族がもつエト



写真 1

スになるのです。

エトスはコミュニティに共有された社会的実践・価値観、信条として定義され、倫理は行動の規範であり、個々人の考え方を指します。家族看護においてエトスに言及することは有用と考えられます。

家族看護のエトスの特徴は、1) 価値の位置 (a value position), 2) 関係のあり方 (a relational stance), 3) 相互作用的な出会い (an interactional encounter), 4) 関係性を重視する強み (a strength oriented relationship), 5) ケアの単位として家族に焦点を当てる (a focus on family as unit of care) の5つです。ポストモダン的な見方をすると家族の真の問題は社会的な意味合いに影響をもたらします。

Foucault は3つのドメイン—知識、パワー、関係性—がポストモダニズムの世界では重要と考えました¹⁾。家族看護の実践に際してケアすることとコントロールでは矛盾をはらんでいるので、Foucault の倫理枠組みが示唆する家族看護のエトスの枠組み

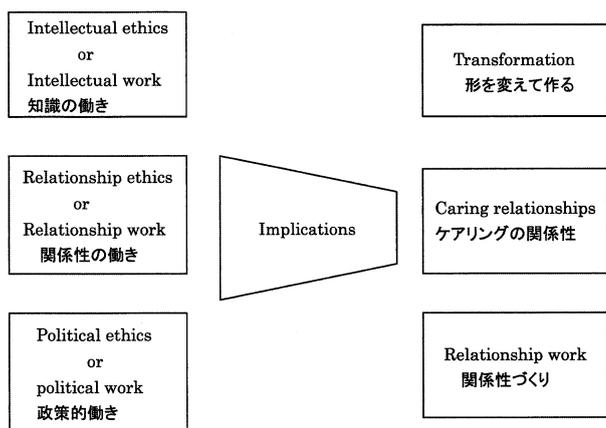


図1. Implications of Foucault's Ethical Framework

を提示しました。Burchard 先生は枠組みの構築に、Foucault の3つのドメインにもう一つ Health の概念を入れているように思われます。

知識の働きは形を変えて作る (Transformation) に関わり、関係性の働き (Relationship ethics or Relationship work) はケアリングの関係性 (Caring relationships) に、政策的働き (Political ethics or political work) は関係性づくり (Relationship work) を示唆します (図1)。

Foucault の枠組みと家族看護のエトスを統合したアプローチは、政府に対する本当の挑戦になると考えています。看護が家族と共に力を行使し政策を作り、健康のための資源の統合を要求していかなければならないでしょう。それは今までの家族看護を超え、政策に関わっていく。このような統合的アプローチは、メタパラダイムを超えるものです。看護を社会的な意味合いでとらえることなのです。これは地域看護における第3の革命 (第1は19世紀初めの社会の急激な変化・動乱, 第2は1980年頃のア

ルマアタ会議と説明している) を意味すると Burchard 先生は述べ、家族看護はケアの新しいパラダイムではないかと締めくくっています。

Foucault を理解しようとするにも莫大な執筆があり、どこから手をつけてよいのか分からないぐらいです。Burchard 先生は少なくとも知識、関係、およびパワーにおける彼のポストモダニズムの見解を把握することだと、下記の文献の1)を教えてくださいました。

Burchard 先生のプレゼンテーションを通して思考する楽しさを味わうことができました。機会を作ってくれました森山美知子先生、場の通訳をしてくれました岩本由美先生に感謝申し上げます。

文 献

- 1) Cooper, M. & Blair, C. : Foucault's Ethics, Qualitative Inquiry, 8 (4) : 511-531, 2002
- 2) Burchard, D. : Ethos, Ethics and Endeavours : New Horizons in Family Nursing, 7th International Family Nursing conference, 2005 (in Canada)

注1

ミッシェル・フーコー Michil Foucault (1929-1984)

フランスのポワティに生まれる。フランスの哲学者、思想家

ミッシェル・フーコーは、哲学にとどまらず、心理学・医学などあらゆる学問ジャンルに大きな影響を投げかけた人である。彼は、学問を作り上げてきた「人間」の見方に疑問を投げかけ、従来のさまざまな我々の思い込みを打ち壊そうとした。歴史の中に異なる価値観が存在している証拠を探し、モダン思想の一元論的価値観は普遍ではないことを歴史の中に発見している。精神病、監獄、セクシャリティーのあり方の歴史、言葉・概念形成の歴史などを中心に著作をあらわし、ポストモダン思想に大きな影響を与えた。

主な著作も多量にあり、紹介しきれない。彼の思想と人となりを知るには、『フーコー 人と思想』(今村仁司、栗原仁著、清水書院 1999年)が入門になるであろう。